

## Interview

# 絵本作家 ヨシタケシンスケの頭の中

ヨシタケシンスケ

(絵本作家、イラストレーター)

子どもだけではなく、大人をも魅了するヨシタケシンスケの絵本。

絵本市場の冷え込みが取りざたされるなか、彼は次々にヒット作を生み出す。

さまざまな年齢層の心をつかむ発想は、一体どこから生まれているのか。

ヨシタケシンスケの頭の中を覗く。



ヨシタケの絵本。手前は第6回MOE絵本屋さん大賞第1位受賞作の『りんごかもしない』。

いつも手帳を持ち歩いていて、思いつくままに絵を描き留めています。ずっと続けていて、今では五六冊目になりました。

実は子どものころは絵が下手で、描くのも好きではありませんでした。自己表現をしたいという気持ちもなく、人が必要とするものをつくる職人になりたくて、美術系の学部がある大学に進み、そこで立体作品のデザイン画などを少し描いていました。卒業して半年間だけ会社勤めをしたのですが、あまりのストレスから、イラストと愚痴の言葉をセットで描くようになつたんです。会社の机で企画書を書くふりをして落書きをしていました。それも、人の気配を感じたらすぐ描いている手で隠せるサイズの小ささで。もし愚痴を言葉だけで書いて、見られたとしたら、ちょっと問題ですね。その下に小さい女の子の絵を添えると、これは僕じゃなくて女の子のセリフだよ、と言い訳できるんです。ストレス発散以外の何ものでもないのですが。

そういう経緯で小さく絵を描いていたので、いまだに小さい絵しか描けません。イラストと文章が一体化したスタイルものとのとき出来上がりました。

## 落書きがバレたのがすべての始まり

隠しながら落書きをしていた会社員時代、ある日うっかりして、経理の女性に見つかってしまいました。そして、「あ、かわいい」と言ってもらえたんです。

この人、絶対僕のことが好きなんだ、と思って(笑)。今後どうしよう! いろんなパターンを考え、結局どうにもならなかつたのですが。そのとき、褒めてもらえたことが単純にうれしかつた。人に見せて内容を理解してもらえるんだ、かわいいとまで言ってもらえるんだ、すごい! と思つて、勢いでイラストをまとめた同人誌をつくりました。描き溜めていたものを深夜のコンビニでコピーして、紙にぺたぺた貼り、自費出版で。そのころ、学生時代の立体作品の個展みたいなものをぼちぼちやっていたので、会場で売ろうと思つたのですが、当然、そんなに売れるはずもなく。三〇〇冊刷つたのを、自分の部屋に置いていてもしようがないので、どんどん人にあげました。それがいろいろな人の手に渡り、出版社からイラスト集にしないかといふ話をいただいて、それで三〇歳のときに『しかもフタが無い』(PARCO出版)というイラスト集を出しました。あまり売れなかつたのですが、それを見た児童書出版社の編集者が、「この人に絵本を描かせてみたい」と、企画会議で提案してくださったんです。しかしボツにされ、また提案してはボツにされ……を繰り返し、八年目にしてようやく「そんなに言うなら」とゴーサインが出たそうで、そこで初めて連絡をもらいました。

初めての絵本『りんごかもしない』(ブロンズ新社)を出版したのは、二〇一三年、四〇歳のときのことです。実はそれまで、自分が絵本作家になれる

とは思つてもいませんでした。というのも、過去に一度、他社から絵本の打診をいただいたことがありました。好んでたくさん読んでいたからこそ、絵本といふものに対するハードルが高くなつていたのです。すでに名作と言われる作品が多数あるなかで、自分に何ができるのか、と緊張してしまつて。スケッチは描いていたけれど、お話はつくれないし、絵は小さくしか描けないし、色をつけるのも下手。僕は絵本には向いていないのではないか、と……。

しかしこのときは、取つかかりとなる企画を三つ、編集者が用意してくれました。その中に「りんごをいろんな目線で見てみる」という、「りんごを知らない」のテーマそのものばりの企画があつたんです。この時点ではりんごでなくともよく、何か一つのモチーフをさまざまな角度から見ることで、ものの見方の多様さを子どもに面白がつてもらうための絵本、という企画でした。これはすごく面白そうだ、と思いました。

振り返って考えると、お題を与えたことで、それまで一〇年以上続けてきたイラストレーターの経験が生きたのだと思います。イラストを発注されることは、記事の内容にぴったりな絵を描くといつた役割と、サイズや比率などの制約があります。そ